特 100
85

酒客の友

全

始

特100
85

まれやまとうたは古今集の
序なるべし俗諺大ほは絵節を古へ
ぶりと今ぶりと久しくあつめて一百とな
なれりそれを古今大ほは絵
ぶり一名百人一首とぶ柿ぶ
猫ぶ表紙恵四郎
京乗物紙
版のぶしてもの
しの名一されハぶやさとれと柿ぶあて
世ぶ公ぶして同好の友ぶ見ぶ乗ぶ
のを乗をひらくるとなるハ多な

大正
8 1 8
交内

らとて家柄の事ハ貴人あると知られたる
小豆流の長板右紙所人の遠人なる
む孫左衛門ハ新造の所を云られ
て常ハ口ずさびの記憶正まる
しの七十位それハ西念寺の安ハ
寄り事ハ云れその所作三年を加ひ
たりある時分と板ひしとと話もこ
ろハ乞れたれと いとまなきの方の
見えなく年月をとらうちに
む孫氏ハ大正六年諸年の日菩薩

の所の寄りむと共ハ七十まりハ七せ
を一形として永き眠りハつれ見れハ
数一在をおもひ出ずるハ医学
しのして霊をなるさめとなる
られハ其伝吸寄つる事とて調ふの
たつれ かなる事ひ あり先見そ
者の人のをしへ成 文そさらに
たたをいなさ人とい さらあらま
しものへて 帰ハ板ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

友

風

時格之

萬れ國にためしなき、我がうら安の國
体ハ、ひとつみたねの、すめらきを、いた
ゞきまつる國民ハ、上をうやまひかみ
ハまた、下をみてますならはしれ、大義
名分あきらかに　神代も今もかゝ
りなく、榮につゝ、君れみいつは、いや高
く、國のひかりハ外國までも、かゞやく、
御代あそめてたけれ

やまとよしきの日の本は、豊あしはら
の中つ國、あやかしこきすめらきと、
あめつちひらけし初より、あまつひづ
ぎのをりをり、うごくあとあきたか
みくら、千代萬代榮に行く　これ
ぞ御國の外國よ、すぐれて尊き、大和男
のうましくに、まもれや守れ日の本を、
やまと魂ひたゆみなく

抑松のめてたきことは、ふんの始皇の
御狩の時に、天俄にかきくもり、大雨ふき
りにふりしかは、みかどは雨をしのが
んと、小松のかげによりたまふ、その松
俄に大木となり、　みかどは雨をふ
のがれて、その松よ太夫といふふよく
くだされし、かよふにめで度松が枝の、
さかゆる御代こそめでたけれ

むかしもろこしの張公けいも、九代の
間一族一ッ所にすむといふ、時のみか
どゝ、かたぢけなくも、公けいか家に御
幸ありて、一族にたしむゆゑをとひた
まふ、公けい用紙をとり出し、身をつゝ
しんで筆をとり忍といふ字をかい
て奉る、かんにんと、まもらは家内むつ
ましく、榮にさかゆる萬代までも、忍と
いふ字をまもらんせ

君命受けてますら雄が、花の都につき
しより、皆大君の御爲とて、六とせ七と
せかり枕、こゝろづくしも水のあは、め
ぐるみかげの日はれちて、弓張月のか
げうすく、　ところにもなきぬれき
ぬを、いかにせん、きのふにかはるけふ
の空、加茂のうき橋はたらずゝ、こんな
うきめはせまいもの

書生羽織れいもそれをきけは、もとは西國諸藩より、君國の御ためとて、をさなき時より國をさり、孔子れ門に入りしより、ひるはひめもす夜もすがら、再ど(さい)くする身のうやつらさ　あらき風(ハル)もあてまいと、親こゝろ、母よりれくりし夜の物、ねまきかはりにせよとの羽織を、晴着にするとは氣がしれぬ

月れかがれかさゝ波か、流れもきよき菊水の、はたを二度ひるがへし、をさおけれとも正行は、百人つゝもの引つれて、金剛山のみねつたへ、ころしも正平戊子の春、　むらがる大軍きりまくり、いたはしや、其身も四條縄手にて、きゆるも君と國のため、忠臣孝子のかゞみなり

近江八景ていはふなら、なんのあはず
ま、くよ〳〵と、おゝ、ろ矢はせに氣をも
んで、わたしや堅田まてい女たて、文の
たよりをまつからさきに、比良にとめ
たい暮の雪、とけてたがいまこつぼり
と、だいてふたりゝぬれたぞし、これ
からゝ、せたいもたせて三井の鐘、堅い
約束石山寺も、秋の月とは氣がこれぬ

君君たれは臣も又、波よく舟をうかふ
あり、君上にいまして仁深く、下も又か
みに、よく手をつらね、子孝こふしれを
しへの道を、心まかけてれこゝへは、吉
例四方にあらもれて、民のかまぞ
もまぎはしく、よろこびに、よろこびか
さなるさゞれいしの、いはほにこけのむ
すまでも、戸ざゝぬ御代こそめでたけれ

小倉山その内に、よくも揃し、六歌仙、在原の業平ゝ、花も色よし小野の小町、我身よにふる人たのみ、ふみの文屋もあきのそら、むべ山風をあらしほと　これきりれまへはきせんかへ、とかいはは、みやこのたつみ鹿そすむ、僧正へん照きかないうちは、ひとりで黒主をするわいな

うきなたてられ世ようたはれて、そふにそはれぬ身のつらさ、れくる月日もながゝ、と、ひとりかもねん床の内、行へもさらぬ戀れみち、今一度のあふ事の、をとめの姿めに見にて　ねやのひまさへつれなくも、やくやもしほの、つらぬきとめぬ玉ぢる、かこちかほなるわがなみた、袖につ、めといろに出る

我ものとおもへはかろし、笠の雪とは
はせをさん、袖ひきあめてもふりそな
ものよ、きかくらんせつ苦の世界、志よ
くさん人はなんといふ、おもふ男は山
鳥の、ゝとめする身のはかなさよ　硯(ハル)
の水のこい中を、たが水さして、うすく
されたもみのいんくわ、夕べの床のむ
つごとにないてわかれし今朝は雨

みかどより賜はりし、りんしよを正成
とり出し、世はこれまでとおもふにゝ、
あれをなんぢにゆつるなり、あと尊氏
の世とならは、吉野の山の奥深き、忍い
りよをなやまし奉らん　をさなけ(ハル)
れども正行よ、さすがは父の、忠義の心
をくみてあれ、ながれつきせぬ菊水の
はたを二度ひるがへせ

きのふもけふもあすか川、さかりひさしき櫻川、秋はもみぢゝくれなゐの、にしきながるゝ立田川、月のひかりハ玉川や、あれ鳥がなく鳥の名の、都ゝ名所むすみた川、戀(ハル)づつもりて淵(ふち)となる、みなの川、人のゝ志のんで大井かは、あんちんおいかけきよひめは、大蛇(おろち)となりしも日高かは

ひと聲ハ空に月、石山寺ハ秋の月、さらしなは田毎の月、梢にれありし明けの月、横ぐしおせんハ三日月で、梅が香そよぐ窓の月　出(ハル)雲にあつまる神無(な)月、さみだれの、ふる夜ひろかに松の月、志のひあふよのおぼろ月、ふけてさびしきねやの月

みねのあらしか松風か、たづぬる人の
ことの音か、さかの〻、奥の露深き、草ふ
みわけて仲國は、さす月かげの柴の戸
に、ものはーやすらひ聞けれは、こごふの
局(つぼね)まおはしますうれしや君が玉
章(ふみ)を、とり出し、簾(みす)の内へと奉る、たゞち
に見返し賜はりて、大内さーていうが
る〻

春は夜に花の宴、櫻のしづく硯水、たゝ
ぎくゝすみ染の、あまたの官女あつま
りて、大納言中納言參議宰相めさせら
れ、櫻の御題(だい)を賜りて、おもては衛
士のたく火さに、夜もふけりや、(ナリカラブシイレ)「花
の都ゝうたでやとらぐ敷島原やつと
めするみは誰とふしみの墨染」すみ染
さくらや、小町さくらや御所さくら

色はみどりの柳津ま、たゝせたまふゝ
靈巖山、下たにながるゝ只見川、めぐみ
も深き魚ぶちや、萬かぎれぬ龜石の、ち
ぎりをむすぶ圓藏寺、み堂にかゞやく
月の影　遠ち近ち人のたゝにまなく、
願ひ事御くじはぼさつの御利やくで、
女房となりたるそのときは、開運出世
の子ができる

川竹の身はひとつ、うゝとまゝとの二
タ瀬川、あだなゝがほになれこんで、文
もゝどなくかきおくる、待身につらき
おきごたつ、じつに夢にもひぢまくら
ねてみつまでとたよりなく　片時
あはねはくよ〳〵と、おたがへに、あへ
はくぜつのたねとなる、きみをおもへ
ゝながゝ〳〵ま、あはぬむかしがましぞかし

春のかすみのうら〳〵と、たなびく山の
あなたより、のぼる朝日のにほひきて、
庭に咲たる梅が枝に、谷の戸出しうぐ
ひすの、なく音もゆかしきのふけふ、あ
したのどけき此頃の　野には若菜
をつみはやす、をとめが、袖ももすそも
はる風に、なびく姿が青柳の、いとゝつ
ながるつはくらめ

しんにつれなやきかゝやんせ、おそれ
おほくも身もすそ川の、高き氣さきゝ
たゝんとて、すいな心れ深草の、九十九
通も水にして、とよのあかりの花のゑ
ん、ときめきたりしもうたかたの　大
内山のその九重にも、すみゝびて、ひと
へ衣の外はにたちし、小野の小町の、末
をみやゝんせ

いかにせんもゑほやく、煙りも今ハたに〳〵に、あるゝあられぬわびすまゐ、都のうちもなつかしく、須磨や明石の月の夜も、むかしをゑのぶむつゑとゝ、みたれ心にもしもやと、　君のおとづれ松風も、村さめも、友ねによぶや浦千鳥、松年さかはのことの葉も、いまハあたなる筆のあと

世のうさをのがれて今は山住居、月と花とを友として、炭ろにかけしあられ釜、たぎるをしはし松風と、入り來る客ハにぢりより、ぞふしてゑはしおきとこに、かけし墨ゑはうすくとも　ゆかしき色や青竹の、ふたおきや、ふくさ、はきのおもゑろさ、茶水くみとるかけひのおとも、いつかふけゆく四疊半

あれかりかねの只一羽、夜更てきけは片
たより、つれなきものとおもひねの、ゆ
めおぼろかすさよまきぬたうちくもる
よの村雲ゝ、更行まゝにすみわたる、月
のひかりにうの人の　おもかげう
つる事なれは、こがれはせじと、まゝも
なんだにかきくれて、月はさにても我
むねは、ひをりおくる、袖れあめ

追て行うの先ゝ、海道いちの大井川、お
のをみだしてふる雨に、いとはずみゆ
きゝ川はたへ　是レ申川越だち駒澤次郎左
工門といふおさむらいは、かなやへおわゝりなされ
しか、はよふきかせてくたさんせ　川「ヲットそのさ
むらいは、よふ〳〵今のさきに、わたつゝ「チ　イ
きゝにませぬ川越たちと、あふぎをた
きしめなきしづむ

戀くさにかくなみた、みとせはいたよ
に、すまのうら、行平れ中納言、都ゝきら
くのそのあとで、村さめ松風二人して、
このほとのかたみとて、おんたてゑぼ
しかりぎぬを　立わかれいなはの
山の峯におふる、松とし聞は、又あふ事
もと、おたがいに、心をあかしのすまの
浦、すま、のかほしてなく千鳥

あとの音いろや三味せんの、いとのみ
だれやおぢうどの、ゆくへとはるゝこ
のむねの、せつなさつらさあぢきなや、
かくせはうきよの道ゑらず、いへは戀
ぢのぎりた、ず、二タみちかけしわゑ
ひとり　なまぢひ命のある身のつら
さ、水せめ火せめ、つるきの山もなんの
その、ぎりのゑがらみなざけのせんぎ
いつそいはふか、まてゑはし

月おちからすないて霜天にみつ、ふと
めをさまふながむれは、もみぢのかげ
ゑ漁とりの篝のかげもうすくあるは
るかにきこゆる鐘の音、ありやこそ城
外のかんざん寺、風うよ〳〵と物すごく
ちぎりみじかき舟のうち、手枕の、又あ
ふ其日もさだめぬうちゑ、ごんとわか
れをつぐるとゝ、鐘がうらみぢやないかいな

明治戊辰の中れ秋、二十三日の朝また
き、戸の口原の戰に、やむなく退却瀧澤
の、飯盛山によじのぼり、はるかゑ見渡
す鶴が城、ほのふは空に立のぼる はゝ
やこれまでと十九人、いさぎよく、血ゑ
ほに染し紅葉の

「青年忠死報二藩君一涙ハ落ツ荒邱十九墳。唯惜ム内訌ニ亡ビ壯士一。不レルヲ従ハ清露外征軍一」

赤き心をゑ
のぶれゝ、袖に露ちる白虎隊

慶應四年の戊辰の役、きくもいさましい白虎隊、十九人がこゝろをあはせ、なれしお城をふしおがみ、かたいやくそくいひかはし、をさな心の一すぢに、ついはかなくも瀧澤の飯盛山に名も高き、露ときゆるみも皆君のため國のため、これぞ日本の鏡となりて、末の代までも名をのこす

ほまれも高き曾我兄弟ハ、かたき工藤をうさんとて、十八年の苦勞かんなん、いこんかさなる血の涙、志のつく雨ともろともに、袖をしぼりて忍び入、そのときふたりのいで立ちは母より（ハル）さまへし小袖をは、いげんけだかく、たすき十字にあやどりて、富士のすゝの、狩小屋に、なんなくかたきハうちにけり

おんいたはしや、常盤御せん、今若乙若
ふた袖に、つゝめどあまるうきことの
幼牛若へふとところに、おやるちぶさに
いだきねの、あらき風にもあてぬ身を
雪のふる夜にかちはだし、　小和田
の宿とさしかゝり宗清へ、あまたの組
子を下知なせば、ときわ御せんへうく
ひすの、巣をはなれたる風情なり

雪の夜にたび僧が、柴のいをりにさゞ
ずみて、いちやのやと、のたまへへ、ま
づ〳〵これへいらせよと、ひそふの鉢の
木きりくべて、いちやをあかしたまへ
かし、常世がおんせつさい明寺、　ち
ぎれたよろいよやせた馬、さび長刀、こ
れが一世のはれとなり、加賀に梅田越
中にさくら井、上野松枝合せて三ケの
庄をたまはりし

中宮御産おんためぇ、非常の大赦おこ
なされ、きかいが島ぇ流人のうち、成常
安頼ぇやめんかる、きいておどろくぇ
んかんは、なぜに我名はあるまいと、あ
らいそ島にかきぇづむ　たのむと
はかり手をあはせ、安頼い、われら都に
のぼりなば、萬事よろしく申上、やがて
歸らくをまちたまへ

たのしみもくるぇふみも、うれしきぇを
もうきことも、世のありさまをつくづ
くと、人の身の上けふ見れば、あすは我
みの上となる、げに定めなきうき雲や、
月の光りを見やぇふやんせ　はれても
くもりくもりては、もれわぇる、皆なに
事もかくやらん、かならずくよ〳〵おも
はずに、心大きくもたぇやんせ

松島の風景ハ東北一の名所にて、千賀の浦べの春がすみ、こがびくけふり塩竈の、烝氣帆まいのでついりつ、八百八島をめぐる舟、あかぬながめハ富山扇谷（ハ）ほてい大黒ゑびす島、浦千鳥、なくねもひゞく端巖寺、見わたすかぎり千代かはらじと、いはほに根ざしの松のいろ

鎌倉の鶴が岡、足利將軍忠義公、かぶとあらためするうちに、星ときらめく諸大名、われもとつめかける、かぶとの數か四十七、目利（めき）の役はかをよ御前（ごぜん）花のすがたのやさしさよ、もろなをハ、見ゑめておくりし玉章（たまづさ）を、もゝの井よみつけられ、むづとすりや、目にかゞたてゝ立ちわかれ

政岡は鶴千代君の、御かほつくづくう
ちながめ、五十四郡の御大將、朝夕の御
膳も上げにくい、あれ千松いつものよ
ふに、すゞめのうたでもうたやれと、い
はれ千松ちうめんづくり、夕べもろふ
た花よめ子花よめご一年までともま
だみにぬ、あなたがたさへまゝならぬ、
ましてこれ〳〵ふせいゝまゝならぬ

名も高き詩人の上手、唐てとしびか季
太白、酒をかぬるは陶淵明、宗の大家は
東坡よりほうせつさいにはんせきこ
う、是より我朝の詩人をあぐるなら、當
時のはいとん慶喜公　廣瀬たんろ
うかん茶山、賴山陽、鹽のや幸三中に入
れ、東都て五山ゝ名高いけれど、西京れ
親玉は柳川隱居

八天下をいふならは、九州さつまに島津義弘公、四國にハ長曾我部元親こう、中國にては毛利輝元こう、越後上杉景勝公、越前越中淺井朝倉こう、甲斐の國には武田信玄こう、駿遠參州今川義元こう、關東に、北條氏康常陸には、佐竹かんじやゝ陸奥伊達政宗こう、出羽に最上の義明こう

われらがすめる日の本は、上ハ一天萬じようの、みかどをはじめ奉り、國津み民のその數は、五千余万の人々の萬こゝろを一つにし、外國人のあなとりハ露はかりをもうくるなく、朝日のみはた、あじやのうらにかがやかせ、千代よろつ世にわが國の、いこうをのこしつたへなん

楠判官正成は、赤坂千はやにたてこもり、父につくせし誠忠は、天地鬼人をかんどふし、みちにみちたる國賊を、討平らげしいさをしは、比類まれなるあとなりき　またもそむきし尊氏が、雲霞の勢に、むかひていちもんうちつとひ湊川にてたをれける、あゝ、忠臣のかゞみなり

楠朝臣正行は、父の最期のいましめをかたく心に守りつゝ、頃は正平戊子れ年、家に傳へし菊水の、はたを二度ひるかへし、引かへさじと梓弓　矢竹こゝろの一筋に、むらかるてきゝ、むかひて吉野の花とちり、後の世までも、尊み小楠公とゞとなへける

豊臣大閤秀吉公、てじめとれいに身を
おこし、たちまち天下を掌握し朝鮮國
までうちかびきいげんかゞやくあり
さまたさながら龍のくもをゐて、天に
ものぼるごとくかあり　あめりかゐ
うにはゐしんとん、ふらんすの、なぽれ
おんやら大閤と、五大州かる三けつの
一人とあそ聞ゐけれ

備後三郎高徳は、かさぎの山にきんの
うの、たたを一度あけしより、みゆきの
あとをしたひつゝ、あやめもわかぬや
みのよに、御所のみそのゐゑのび入り
櫻をけづりま心の　赤き心を一筋
に矢立の筆て、書のこしたるからうた
は、さくらの花ともろともに、いまの世
までもにほひけり

鎮西八郎源の爲朝あそんは本朝に、ならぶもなき弓とりの、猛將の名はきこえたり、十五歳なるころほひに、大賊二十小戰は、二百あまりの數をへて、筑紫九州うちなびけ、舟をもとにす、弓勢はきもをひやしけり、後琉球におしわたり、たけきいさをゝのこしけり

源三位頼正は平氏一門時をえて、ほしひまゝなるふるまひを、みるに心も、やすからず、頃は治承の年とかや、高倉宮をいたゞきて、あげしいくさは埋れ木の哀れ花咲く事もなく、扇の芝の、露とその身はきえしかと、はしめとなへしきんのうの、その名は世々にかゞやけり

那須のよ市宗高は、八島のたゝかひそ
の時に、平氏の舟の公達か、扇を竿ゝさ
しはさみ、これをいよとてさしまねぐ
宗高ゝうにゐらまれて、馬を靜かにの
りいたし　はなつ矢先はあやまた
ず、扇は空に、夕日を受けてひるかへり
兩軍かんゐのその聲は、なみにひゞき
てやまざりき

肥後れをさなる清正ゝ、頃は文ろく征
韓の、うのさきかけにゐらまれて、忠義
のまこと一すぢに、せめておぢざる城
ゝおく、討てかたざる敵もなし妙法蓮
華のはたの手ゝ　民も草木もおし
かびき、朝せん國ゝ、名ゐそとゞろく鬼
加藤と、もろこし人もこま人も、おそれ
ぬものこそなかりけれ

秩父の庄司重忠は、一の谷なる戰より、ひよどりごえにむかへしか、千ひろの岩の峨々として、あしをたつべきやうもなし、義經あろうんの下知として、三千余騎の人々も　さかさに馬を下だしけるしげだゝは、よろいの上にせおいつゝ、谷をくたりしふるまひゝ、かんぜぬものゝなかりけり

無官の太夫敦盛ゝ、二八ばかりの美少年、赤地にしきのひたゝれに、もゑにたつはかりのひをどしの、よろいの袖をひるがへし、馬を波間よりのり入て、父の舟へといそきける　源家の郎等熊谷がまねぐ扇に、馬をかへして、直實が、やいばの露と消にうせしゝ、あはれといふもおろかなり

征夷将軍家康公、みだれにし世の仇なみを、はらひきよめて天が下、弓はふくろに太刀ハさや、をさまれるよの松平、枝もならさぬ時津風、三百年の大平のもとゝなしたるいさをしハ、ふたあらぬ山の、東照宮のうのとくが、四方にか、やきわたりつゝ、あふがぬものゝなうながりにけれ

相模太郎時宗ハ、鎌倉執權たりし時元の大祖の威にほこり、筑紫博多ゝあだせしを時宗諸將をいましめて、ふせぎ戰とうその時に賊舟波にくつかへり十万あまりの、兵士は、海のもくづとなりて、世に弘安の神かぜと、今の世までもつたへけり

越後の大守謙信い、軍略智謀たぐひなし、甲斐の老將信立と、兵をむすんでとけかたく、ひづゝそつくすたゝかいは、さながら龍虎のごとくなり、川中嶋れ一戰に　多年のうらみはらさんと、とつかんしんげき、電光いなづま水の月、やいばのもとに信げんを、うちもらせしこそいかんなれ

四海波かせおだやかに、木〻のこずゑもおとたにて、戸ざさぬ御代とぞうたふなる、津くらのおきにおく舟ゝ、玉のはしらにしきの帆をあげて、帆つなはさんごのくだをまき、種々のたからをつみかさね　蓬萊山の入ふねに、七福神が、さいつおさいつ大一座、龜のうたひゝ鶴が羽をのし、幾萬歳とぞまひ遊ぶ

ながきよの〳〵の、とふのねふりのみな
めさめ、波のり舟のおとのよきかな、下
タからよんでもながきよの、とふのね
ふりのみなめさめ、波のり舟のおとの
よきかな正月二日のまさ夢に子た
からうんだるゆめをみて、とりあげ見
れは、玉のやうなる男子にて、いはひま
せうぞのぼりざを、ぞやうぶ刀やあやめ草

さんさぞぐれかかやの〻あめか、おと
もせできてぬれか、る、鶴のおんどり
小松のかげで、つまをよぶ聲千代〳〵と、
おまへ百の余わぞや九十九の余、共に
白毛のはゆるまで、酒のさかゑ扇子
をはさみ　せんす　肴で末廣く、ぞちの
やかたは、めでたいやかた、一によめと
り二に孫まふけ、三に黄金のくらをたて

高砂や〳〵この浦舟よ、帆をあげて、月もろともに入りぬほの、おいきのすがたひきかへて、いもせわりなきめをと松、葉色もおなじふかみどり、たとへはんりをへだつともやいはんすな、西の海、あをぎが原の空はれて、さすがいかには惡まをもらへ、萬歳らくまろめでたけれ

初雛祝

玉のよふなる女の子、うみいだしたるその日より、あらき風にもあてましと、ひるはひめもすがら、母はちふをふくませて、あいせはゑみて高わらい、てふよ花よとそだてられいまは彌生となりぬれは、こゝろして、見事に初ひなまつりたて、もゝの節句にまどおつゝいはうやところめでたけれ

明治四十一年六月六十五聯隊入營歡迎之節

みどり色うふ若松の、千とせを契る鶴
か城、ふかきめくみに大君の、みいつは
高くかゞやきて、のぼる朝日の聯隊旗
國を守衛のますら雄が、胸はきらめく
いさをしの　はるゝしはおのゝことな
れど、ま心は、いつれおとらぬ梅櫻、赤き心
のやまと魂、いはふけふあそめでたけれ

大正三年十一月開通唄

岩越鉄道も落成し、のり初め祝ふ若松
のさと、みどり門は日のみたた、なべ
て灯提つくり花、市中のにぎはひ人の
山、能狂げんもよめきて、をとり屋臺
は藝妓れん　開通式の席場は、數万
人、茶のゆ生花てんらん會、花火ゝどん
〳〵うちあげて、いはふけふあそめでたけれ

明治四十一年長濱へ有栖川宮殿下御別邸祝

春がすみ立戸の口、小舟に出てながむれば、波かせたゝぬ小平かた、君がよはひを長濱に、千代をことわぐおきか島
萬代いはふ龜が城、山は秀でゝ水もまた　清き流の有栖川、宮殿下、ふかき恵みに民くさも、生てさかげらん猪苗代、榮ゆく御代こそめでたけれ

明治三十八年征露

いとゞもかしこきすめらぎの、みいつよりて東洋の、波も靜かにをさまりて、がいせんせられしますらをが、きんしくんさよう胸にかけ、御禮まおりはさすがにも、一等國の新年の　川といふ字よろこねして、を、しき馬の、初ゆめみたるうれしさは、貴き人もしづが身もめでたくむかひし御よの春

ろしやは東洋に手をのばし、九十九年
の旅順口、五十余か所の砲臺も、やまと
男のとつかんゝ、さすがの露へいも退
却し、二ー丸山よりうちおろす、我大砲
にかんらくし　奉天鉄れいかはふ
とも、せんりようゝ、露鑑もあまたうち
ゝづめ、陸海軍れいさをしは、せかいに
かがやく日のみはた

鳥つくし

一ト夜あくれはとりの年、春つけとりは
梅になく、とりのきげんゝ尾長鳥、谷間
へだてし山とりの、ひなどりむぐ鳥か
んゝとり、鶴は千とせをたもつ鳥　い
での玉かはもゝ、千鳥、ぬれてなく、すみ
だ川では都とり、をさまるみよのめで
たさゝ庭とりやたいゝの上でゝく

川づくし

ありしむかしにひきかへて、水そこき
よきかはづくし、辨慶さんは衣かた、あ
んちんきよひめ日高かは、朝かほゝ大
井川、き人のおまつゝおとなゑかはよ
おはんゝせなに長右工門（ハル）うきなを
おがすかつらがは、月さにて、千鳥のゑ
ゑもすみだ川、波かぜた、ぬ君ゐ代の
深きめぐみに會津ゐた

柿づくし

かきゝ八さく初おもの、子ゆへに身ゑ、
らず御やま柿、あなたはいつもまめ柿
で、おまいのかほゝまゑぶい柿、娘ゝべゝ
がき一筆かきよ、よめのかざりはくし
柿で、じやうゐゝ樽かき女郎堂柿（ハル）い
もせの中は最上柿、つるの子がきよ、こ
しには黄金の百目がき、こよいもわた
ゑをつるし柿、すけておくれよごゑようかき

いでにけり綱ゝ上いをこふむりて、櫂生門へといろきゆく、あめかせはげしきうゑろより、ゆくをやらじと引とむる、綱ゝきこゆるつはものなれは、何もれならんとふりむけは、鬼にはあらでたをやめの　戀の手くだに渡部も、よはりはて、引なつかむなろこはなせゑところの切るはいとへゝせぬが、びんのもつれが氣よかゝる

青葉ゑげれる櫻井の、里のわたりの夕まぐれ、木の下かげにこまとめて、世の行末をつく〳〵と、忍ふよろいのそでの上に、ちるは涙かたつゆか、正成涙をうちはらひ　我子正行よびよせて、父は兵庫に、おもむきさかなたでうちじせん、なんぢゑゝまできたれども、とく〳〵かへれ古里へ

父上いかにのたまふも、見すてまつり
てわれ一人、いかでかへらん、かへられ
ん此正行も年こそい、いまだ若けれも
ろともゝ、御とも申さん死出のたび、な
んぢをも、よりかへさんは　われ私
のためならず、おのれ討ぢし、なき世は
尊氏のまゝならん、はやく生立大君に、
つかへまつれよ國のため

それもものだびの戰ゐ、たゞ朝鮮のため
ならず、東洋平和の安寧をはからせた
まふゐいりよなり、ゐいりよのほどを
かしこみて、げんきにはたらきゐいか
んに、あつかることを心かけ　軍きの
もとはすめらぎの、玉座の前も、ひとし
き物とおもひゐれ、また上官のめいれ
いゐ、かしこき勅語とふくじうし

奉迎殿下行啓

君の惠みに會津耶麻、郷にほまれの名
どころを、見うなはさんと九重の、雲井
はるかに天下る、ひなの山ぢのこゝか
ゝこ、おくゝも深き草の屋ゝ、幸行まし
ます宮殿下　大御心のかゝこさに、民
くさは、皆萬歳れことほきを、さゝげま
つれる鶴が城、明治の御代こそ久しけれ

おんいたはしや孰盛郷、味方の舟ゝの
りおくれ、父つね盛ゝ身の上を、つげん
とすれと波あらく、浦は名におふ須磨
のうら、大宮人の御座舟に、上け羽れて
ふのまくを張り　主從御けがなか
りしや、かぽと顔、君ゝはゝうのす立ゝ
ぽし、さて熊谷ゝ二タ心と、いはれてせ
ひなくうちにける

九郎はん官義つねは、山ぶしすがたに身をやつし、奥州さしてくたらんと、龜井片岡伊勢駿河、おなじすがたが十二人、べんけいい〻先にたち、あたかの關へとさしが、り　みるよりとがし〻座をくんで、とひかくる、こ、は一生けんめいかんじん帳、おにもあざむくべんけいさいも、はだかで道中がなるものか

衛生を思ふ、朝な夕なのたべものをあれやこれやときをつけて、おはらにこなれのわるいもの、たべて〻かならずかりやせん、からだ〻湯に入りきよやかに　家の内外そうじして、風をいれ、よるはねとこをあた、めて、酒のおかんはよいけれども、さんとのんで〻お身のどく「かいつてよくない事がある」

皇朝二十四孝は、國家のため、をさなき子らにまなべよと、君がのこせしうつし繪を、あまたの畫工にか、せつゝ、三十一字もからうたも、ともにかゝげしさゞい堂、めぐりてみれはたらちねをおもふ心はおのづから、增かゞみ、千代もくもらぬ忠孝の、道にまよはぬ白虎隊、飯盛山にまおらんせ　「遊ばんせ」

うたゝねのはださむや、ふとめをさましおきなをり、かひなのゑびれもみなをし、あんどんひきよせつくづくと、ぬしれね顔を見るにつけ、かういふやさしいおんかたと、うへりやわたしのかほふものもふゑおきなましこちの人、風をひく、つめてもたゝいても氣がつかぬ、小判紙引さきこよりにして、ぬしのね顔をなぶりみる

たぐひまれなる女のかゞみ、うの名へ
井つゝのをとめこが、ふりわけ髪もか
たすきぬ、まだおぼこぎのうちよりも、
君ならなくにとちかひてし、そのみさ
を、もよそよ志て、二タ道かけるあだ
人を、ねたみもやらぬみちもせを、あ
んじわつらひ、おきつ志らなみ立田山、
夜半にや君へたゞひとり、こにさせた
まふへさゞやさゞ

この度出雲の大やしろ、男にやもめの
かいやうに、女に後家のないやうに、帳
面志らべの御ために、はる〳〵この地へ
おんくたり、老も若きもおしなべて、御
禮參りへ夫婦つれ、おもひ思ふ之中
おれは、やるせなや、むすぶは神のこり
やくで、袖ふりあふもたゞやうのゑん、
ゑんはいかものあじなもの

四海波ふづかにて、家ををさめるおは
なよめ、時津風むつまふく、あいにふう
とのあいぎよ能く、枝をさゝせて身に
なるや、老のまつ身をたのしみて、實や
大きな男子にて　ふともおろかやか
、り子に、成長させ、ふめるふんふよも
ゆたかにて、子孫もんによう末長く、を
さまる家こそめでたけれ

婚禮のおいはひは、夫婦の縁を束（アはれ）のし、
よるはするめて子持鮒、數れ子もちて
ゑびこしよ、なるまて命ながらへて、玉
子のよふなる孫をみて、結びふんぶの
二世三世　ふたりが中は大平の、中
ぞゆかしき、だれもふらないあぢのよ
さ、でんぶやたらよ盛あげて、三鹽ので
るまていはひける

一夜明れは新玉の、氣もうきうきとつく
羽の、うたふうたさへひとごとにふたご、
いつしかつもるとしの數、二八姿のあ
いらしさ、心もすくなくれ竹の、色もか
はらぬ姫小松　千代も八千代も萬
歳の、つゝみうつ手は、ゑどろもとろの
さゝきげん、いはひをさめてねよとの
鐘にあらぶ枕のたにから舟

色はゑあんの外とやら、りこふな人も
ぐぢになる、平家に名高き景清も、あこ
やみたさにろうやぶる、身はぼんのふ
ゑひかされて、うきなをながす五條坂、
あれみやゑやんせ三曲の　あゑや
をせめることの音や、水せめ火せめ、つ
るぎの山はなんのその、あとにのこり
し妻や子ゑ、あとれないのがきにか、る

枕さびしきひとりねの、こまぞをうつ
はもしやまた、ゑのふ人かと立出て、み
れとも空に月ひとり、あのやいたづら
くれ竹の、風故障子がうつやぞと、これ
も戀路のまよひかと　うかゝこふし
てをらりうか、ねもやらぬ、細帶〳〵て ゑ
あん顔きのふの玉章又もとり出しひ
とりごと

なんのわすりうこぞのけふ、さみだれ
月の末のゑろ、月なき夜半にたはむれ
て、風の柳のはじめより、ついのりそめ
し屋ね舟の、あかりをけしてよろ外に、
水もらさじと舟そこに　枕はかりの
三味のどふ、ふたりね〳〵の、うれしい ゑ
んちやないかいな、ゑつほりぬるゝ水
の上、つもるくせつはさゞめごと

大坂をたちぬいて、わたしの姿が目ゑたゝは、たれかごに身をやつし、ならはたこやみわの茶屋、五六日もとふりうし、廿日あまりに四十両、つかいはたして二分のある　金より大じな忠べいさん、とが人に、いさしましたもわたし故、さぞやおはらがたちまゑやうが、いんくわぞくぢやとあきらめ下さんせ

あれのやかたは目出たいやかた、七福神のお酒もり、内のていしゆはゑていさん、うちのかみさん辨才天、おざるお客は福の神、家内むつましくかせぎなは、四ッのすみから金がわく　奥の座しきの床の間ゑかけしかけもの、松に竹、鶴と亀とがまひ遊ふ、お家もんじやうでまいあそぶ

ほんにおもへはきのふけふ、月日立のもうはのうら、人のうしりもよのぎりも、いとはぬ戀の三ッせ川、あふせはいつか氣にかゝり、あへゝくせつの種となり、にくらしいほどかはよふて（はろ）だきしめられつだたきしめつ、やるせなや、心てとめてかへす夜ゝ、おはい男のためにもなろとないてわかれしけさのあめ

雪のあしたの煙草の火、さむいよせめておちや一ッ、うれがこうじて酒となり、さきから思へはこちからも、くどくはふかきくどんおんきやう、ふもんぼんたい廿五日の夜、月なき夜半にたはむれて（ぶ）ことはをむすぶなごやおび、尾張かけれは、はじめゝあぢな戀のあた、壽永の秋の風たちて、すまの浦舟こぎわける

露光量違いの為重複撮影

まつやたがへにいひおつけ、二はの松
のちぎりより、ゑんをむすびし相生の、
松にくれ竹玉つはき、二世や三世や五
葉の松、色もかはらぬときわ木の、とも
にゑらがの末かけて千代のゝめし
の若松れ、住の江の、きゝの姫松ひきよ
せて、三三九度のかさねもすんで、君と
ねまつゆかはづかしや

大正七年拾二月廿五日印刷
大正七年拾二月廿八日發行

〔壹部金參拾錢〕

編輯兼發行者　福島縣若松市矢町三七四番地　荒井榛矢郎

印刷者　福島縣若松市七日町二一四番地　中村雅

發行所　若松市七日町一丁目中村益辨堂内　大津繪會

◀益辨堂印刷所印行▶

不許複製

露光量違いの為重複撮影

まつやたがへにいひかつけ、二はの松
のちぎりより、ゑんをむすびし相生の、
松にくれ竹玉つばき、二世や三世や五
葉の松、色もかはらぬときわ木の、とも
にちらがの末かけて千代のさゝめし
の若松に、住の江の、きゝの姫松ひきよ
せて、三三九度のかさねもすんで、君と
ねまつゆかはづかしや

大正七年拾二月廿五日印刷
大正七年拾二月廿八日發行

不許
復製

〔壹部金參拾錢〕

福島縣若松市榮町三七四番地
編輯兼發行者　荒井權次郎

福島縣若松市七日町二一四番地
印刷者　中村雅

若松市七日町一丁目中村益辨堂内
發行所　大津繪會

◀益辨堂印刷所印行▶

終